

インクルーシブ教育における動物飼育

東京学芸大学附属小金井小学校 関田 義博

1 はじめに

インクルーシブ教育とは、「人間の多様性を尊重し、障害のある者が精神的及び身体的な能力等を可能な最大限度まで発達させ、自由な社会に効果的に参加することを可能にするという目的の下、障害のある者とない者が共に学ぶ仕組み」である。

本校では、平成26年度に文部科学省インクルーシブ教育システム構築モデルスクール事業を受託し、それ以後は継続して、小学校におけるインクルーシブ教育のあり方を学校組織として構築することをめざしてきた。本校におけるインクルーシブ教育の最終的な目標は、児童が持つそれぞれのよさが集団において十分に発揮されるよう、一人一人の個性や特性が受容されるあたたかい雰囲気づくりを、教育活動全体で実現することである。

本校に在籍する特別な支援、配慮を必要とする児童については、特別支援校内委員会で情報を共有し、それぞれのニーズを探りながら具体的な支援のあり方を検討している。必要に応じて本学教員、学習支援員、外部機関等と連携するとともに、個別の支援計画を作成することで支援のあり方を学校全体で共有している。



リソースルームでくつろぐ児童

2 取り組みの充実に向けた環境整備

インクルーシブ教育を充実させるためには、特別な支援、配慮を必要とする児童に対して、学習指導、生活指導等において様々な対応を行うことが求められる。支援の対象となる児童が抱えるニーズに応えるためには、まずは児童の居場所やお気に入りの場所を確保することが必要になる。以下に、そのための主な手だてを列挙する。

①学習指導上の工夫

- ・大学院生等の学習支援員を配置することによる学習支援
- ・リソースルーム（支援に必要な物品等が揃った個別の支援を行う部屋、癒やしの場でもある）の活用
- ・タブレット端末等の ICT 機器を活用した学習支援

②生活指導上の工夫

- ・学校生活の基盤となる居心地のよい場所の確保
- ・あたたかさや柔らかさのある言語環境の整備
- ・支援、配慮を必要とする児童が受容され排斥されない学級集団の形成

③校内環境の整備

- ・社会的環境の整備、充実（図書館、校庭のベンチ、リソースルーム等）
- ・自然環境の整備、充実（メダカやヤゴのいるビオトープ、飼育舎等）



「やわらかくて気持ちがいい」

3 インクルーシブ教育の視点による動物介在教育

(1) 本校における動物飼育の考え方

本校では、「小動物飼育サポートネットワーク」(図1)という考え方に基づいて、学校全体で生きものを守り育てるとともに、児童が生きものと積極的に触れ合うことのできる環境を構築することをめざしている。

具体的には、飼育環境を「本園」と「分園」に分け、飼育舎等の「本園」にいる生きものを「分園」である教室や理科室等へ長期間もしくは一時的に移動することにより、児童が生きものと接しやすくするというものである。また、このネットワークを有効に機能させるための取り組みとして、愛育委員会の高学年児童による常時活動、獣医師による定期的な支援、保護者による休日の世話、担当教員(副校長)による取り組み全体のコーディネート等を位置付けている。このようなネットワークを構築し、学校ぐるみで動物飼育に取り組むことにより、世話や管理が一部の教員の負担にならないというメリットも生じている。

(2) 生活科における動物介在教育

本校では、現在、うさぎ5羽とチャボ6羽を飼育していて、生活科の指導計画では、1年生がうさぎやチャボと触れ合う学習を3学期に設定している。このような低学年期における動物とのかかわりは、インクルーシブ教育の視点からも重要と考える。

①学習のねらい

- ・うさぎやチャボなどの小動物と触れ合ったり飼育したりしながら、生きもの

の親しみの気持ちを持つことができる。

- ・生きものは命を持っていることに気づき、生きものの命を大切にすることができる。

②単元の計画(8時間扱い)

- ・1,2時…うさぎやチャボをだっこしてみよう
- ・3,4時…うさぎにえさをあげよう
- ・5時…うさぎの心ぞうの音を聴いてみよう
- ・6,7時…うさぎやチャボの家をきれいにしてあげよう
- ・8時…学習の振り返りをしよう

③学習の展開

1年生は入学後の学校探検において、お相手さんの2年生に案内してもらいながら、飼育舎でうさぎとかかわる活動をしている。本単元では「うさぎやチャボともっとなかよくなろう」という課題を設定して学習に取り組む。なお、うさぎに触ると目や皮膚のかゆみ・喘息等を発症する児童が学級に在籍する場合は、マスクやゴム手袋を使用して活動させる等の配慮を行う必要はある。学習の振り返りでは、うさぎとのかかわりでうまれた物語を、絵や文で表現すること等をねらいとしている。

④学習のオープンエンド

教室を「分園」とする考え方から、飼育舎のうさぎを1羽教室に移動し、学習終了後も児童がすすんでかかわり世話することができるようにしている。それにより、うさぎの近くが自分の居場所となる児童は、教室でうさぎとかかわることに大きな喜びを感じながらうさぎとのか

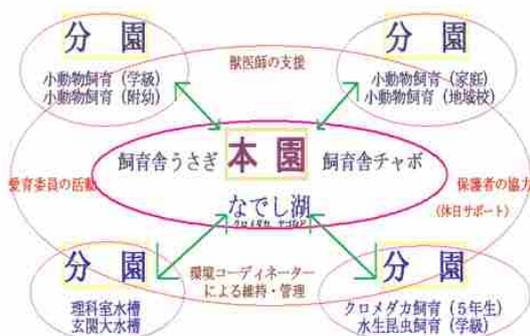


図1 小動物飼育サポートネットワーク



心臓の音を自分とくらべる

かわりを深める。休み時間にすすんで餌やりや掃除を行うことができる児童には、「学びに向かう力、人間性」につながる資質、能力が徐々に形成されていると考えることができる。

(3) インクルーシブ教育との接点

①うさぎに対する他者意識の芽生え

うさぎと触れ合ったあとに、「うさぎは人といっしょにいるとつらいことがわかった」という記述をする児童がいた。この記述からは、うさぎに対する他者意識が芽生えていると考えることができる。た、ケージのトイレを掃除するときうさぎがいつも怒るということに気付いた児童は、「いつも使っているトイレをとつぜん持って行かれたら、自分だったらどう思うか」と、うさぎの気持ちを自分に置き換えて考えていた。

②うさぎから「人」へ

愛育委員会に所属する高学年児童のように、長期間にわたってうさぎやチャボとかかわり、すすんで世話することができるようになると、動物たちは児童に対して「逃げない」「威嚇しない」「近寄ってくる」「なつく」といった行動を示すようになる。私たちは、このような人と動物のやりとり、動物への上手なかかわり方は、人と動物の関係だけでなく、友達とのかかわりや人間関係にも適用できることを、様々な機会を通して気付かせていきたいと考える。



教室での動物飼育（ハムスター）

③動物と触れ合うことで気持ちが安定

支援、配慮を必要とする児童が、生きものへの興味、関心が高い場合、「小動物飼育サポートネットワーク」を構築することにより、児童が動物と身近に触れ合える環境を、校内に確保することが可能となる。

また、支援の必要がなくても、児童がけんかをして友達とうまくかかわれなくなったとき、動物と触れ合うことで気持ちが癒やされることで安定し、教室に戻る元気や勇気を取り戻すことができる場合もある。

4 おわりに

休み時間になると、多くの児童が教室を抜け出し、お気に入りの場所を求めて校庭等に飛び出していく。校庭へ出た児童は、ボールゲーム等で友達とかかわりながら、スポーツでの自己実現を楽しむ。動物が好きな児童は、動物がいるところに集まり、動物との触れ合いや対話を楽しむ。

このように、児童が友達や動物と様々な形でかかわり合うことで、それぞれの場所では教室の授業とは違った学びが展開することになる。そして、それぞれの学びにおけるゴールは、「多様性の理解、尊重」と「共感、共生」と考える。児童が動物や人とかかわりを通して自分とは違う個性や特性を持った他者の存在を理解し、たがいの存在や生き方を認め合いながらコミュニケーションを深めつつ学校生活をすごしていくことは、今後のグローバル社会を生き抜くうえで極めて重要なことと考える。



さすが愛育委員会のお兄さん
—チャボのボス「あつくん」を載せて—
(東京学芸大学附属小金井小学校副校長)

